

(8) 薬物乱用の頻度が最も高かった年齢は、平均 22.9 歳±8.0 であった。

(9) 減量目的で薬物を乱用した者は、22 名で、有効回答 95 名中 23.2% を占めたにすぎないが、薬物乱用によって「食欲が変化する」、と答えた者は、72 名で有効回答 94 名中 76.6% にのぼった。変化を報告した 72 名中、食欲減退効果を述べていたのが 63 名と 87.5% を占め、食欲増進効果の 7 倍に達した。

(10) 薬物乱用によって「うつ状態」の改善がみられる、と答えた者は 77 名で、有効回答 95 名中の 81.1% を占めた。

(11) 自傷経験者は 56 名で、有効回答 98 名中の 57.1% にのぼった。その内、32 名が男性で、女性は 24 名であった。女性の方が自傷者の占める割合が 80% と男性と比べて (47%)、有意に高かった ($p<0.01$)。初めて自傷した年齢は平均 19.3 歳±6.9 で、最年少は 7 歳、最高齢は 41 歳だった。これまで経験した自傷回数は平均 2.25 回±2.9 だった。

自傷方法の内訳は表 3 のとおりである。刃物で手首を切る (いわゆるリストカット) が最も多く、28 名であった。また、手首切りや抜毛、皮膚引っ掻き行為は女性に有意に多く、逆に頭突きは男性に多くみられた。

自傷行為の動機は表 4 に示す。自殺目的が多くを占めたものの、実際にその行為によって死のうと考えていた者は、そうでない者の約半数にとどまった。

性差に関しては、女性の方が有意に気分転換目的での自傷行為を報告していた。

(12) 希死念慮がある、と答えた者は計 79 名で、有効回答 93 名中 84.9% を占めた。

(13) 自殺企図歴のある者は 55 名で、有効回答 88 名中、62.5% を占め、初回企図年齢の平均は 22.8 歳±10.0 で、女性の方が男性と比べ、約 7 歳若かった (表 5-1)。企図回数の平均は 8.2 回±16.4 で、1 回から 100 回まで回数には個人差が幅広く見られた。女性の方が平均回数は男性の約 5 倍と有意に多かった (表 5-1)。

自殺企図の方法では、大量服薬が最も多く有効回答中の過半数を占めた (表 5-2)。

実際に自殺企図後、入院を要したか否かについては、入院したケースが 22 名で有効回答 50 名中 44% を占め、入院しなかったケース 28 名 (56%)

表3 自傷方法(複数回答)

	度数	女性%	男性%
手首を切る***	28	82.6	27.3
根性焼き	27	47.8	48.5
ピアス*	20	52.2	24.2
刺青	15	21.7	30.3
こぶしを打ち付ける	15	20.8	30.3
前腕を切る*	14	39.1	15.2
頭を打ち付ける**	12	4.2	34.4
鋭利な物で皮膚を刺す	11	8.7	27.3
名前彫り*	11	33.3	9.1
その他の部位を切る	10	30.4	9.1
皮膚を引っ掻く**	8	29.2	3.0
抜毛**	6	26.1	0
その他の自傷	4	4.2	9.1

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

表4 自傷行為の動機(複数回答)

	度数 (%)	女性%	男性%
自殺目的 (その方法で死のうと思った) (その方法で死のうとは思わなかった)	31 (32.5) (67.5)	62.5	48.5
見せしめ	17	32.0	27.3
腹立ち	14	28.0	21.9
気分転換*	14	40.0	12.1
その他の動機	15	32.0	21.2

* $p<0.05$

表5-1 希死念慮と自殺企図

	女性	男性
希死念慮あり	90.0%	82.5%
自殺企図初回平均年齢**	18.2歳	25.6歳
自殺企図平均回数*	16.5回	3.4回
自殺企図後の入院経験	52.4%	37.9%

* $p<0.05$, ** $p<0.01$

とほぼ二分した。

(14) 過去に一度でも窃盗歴のある者は 69 名で、有効回答 94 名中の 73.4% にのぼった。初回窃盗年齢は平均 12.8 歳±4.7 で、平均窃盗回数は 27.6±74.9 と非常に個人差が大きかった (表 6)。

(15) 性的虐待歴のある者は、25 名で、有効回答 88 名中 28.4%を占めた。25 名中、女性が 17 名、男性 8 名で、この性差は統計学的に有意であった（表 7）。初回被害年齢の平均は 11.7 歳±6.3 で、性差は認めなかった。

身体的虐待歴のある者は 43 名で、有効回答 96 名中、44.8%を占めた。初回身体的虐待の平均年齢は 8.7 歳±4.9 だった。身体虐待に関しては性差を認めなかった。

(16) 不登校については、有効回答 89 名中、48 名が経験あり、と答えており、53.9%にのぼった。小学校から大学までの頻度と性差は表 8 に示す。中学校においてのみ、女性の方が有意に不登校経験率が高かった（表 8）。

(17) 対人、対物暴力癖については、有効回答 90 名中、それぞれ 21 名（23.3%）と 45 名（50%）が「あり」と返答した。性差は表 9 に示す。

(18) 各種評価尺度の結果は、BDI の平均値が 26.0 点±11.3 で軽うつレベルであった。BITE、WURS、A-DES の平均値はそれぞれ、16.7 点±10.7、48.3 点±24.5、3.16 点±2.4 であった。BDI と BITE で女性の方が有意に高い点数を示した（表 10）。

2. 予後調査

(1) 居住形態の内訳は表 11、同居人の内訳は表 12 に示す。過半数は賃貸住居で生活し、次いで実家で暮らす者が多かった。同居者は無い者（独居）が 4 割を占め、親との同居がそれに次いで多かった。

(2) 退院後の自助グループの利用状況は、全く参加していない者が 6 割を超え、性差は見られなかった（表 13）。

なお、入院前に自助グループの利用歴がある者は男女とも 4 人ずつの計 8 名（8%）であった。

(3) 生活の規則性については、起床時間、掃除片付け、歯磨き洗顔、食事、計画性、夜更かし、の 6 項目について 5 段階で評価してもらった。結果は表 14～19 のとおりである。

(4) 退院後の勤務形態の内訳は表 20 に示す。退院後一度も働いていない「無職」が 30%を占めて最も多く、2 番目に多いのは「週 35 時間の正社員」で 28%を占めていた。

退院後に就いた職種は、飲食業が最も多く約 2 割を占め、ついで会社員、土木建築関係と続いて

表5-2 自殺企図の方法

方法	度数	女性 性別%	男性 性別%
大量服薬	29	63.6	48.4
手首自傷	11	27.3	16.1
その他の方法	13	9.1	35.5
欠損値	47		
合計	100	100.0	100.0

表6 窃盗

	女性	男性
窃盗経験	70.0%	75.0%
初回窃盗年齢(平均)	12.8歳	12.8歳
平均窃盗回数	19.8回	31.0回

表7 性的・身体的虐待経験

	女性	男性
性的虐待***	60.7%	13.3%
初回性的虐待年齢 (平均)	8.0歳	6.0歳
身体的虐待	58.6%	38.8%
初回身体的虐待年齢 (平均)	9.0歳	8.4歳
現在も身体的虐待あり	18.8%	4.8%

***p<0.001

表8 不登校

	度数	女性%	男性%
不登校	29	63.6	48.4
小学校	16	31.8	18.4
中学校*	23	50.0	24.5
高校	17	31.8	20.4
大学	2	4.5	2.0
その他	6	8.3	7.7

*p<0.05

表9 対人・対物暴力癖

	度数	女性 性別%	男性 性別%
対人暴力癖	21	25.0	22.6
対物暴力癖	45	53.6	48.4

いた（表 21）。

就労期間は 3 ヶ月以内が 1/3 を占め、1 年以内の就労が 2/3 を超えている（図 1）。短期の就労が多いのが特徴である。

（5）退院後の乱用薬物の内訳は表 22 のとおりである。覚せい剤が最も多く、次いで有機溶剤と大麻が同数だった。

退院後に再使用した時期は、「退院直後から 3 ヶ月以内」が 6 割を占めていた（表 23）。

一方、最近 6 ヶ月以内に再乱用した人に、理由について選択肢の中から選んでもらったところ（複数回答あり）、最も多かったのは「刺激を求めて」の 33.3%で、次いで「疲労除去」の 16.7%だった。

（6）逆に断薬が続いている人に、その理由を複数回答ありで選んでもらったところ、その結果は表 24 のとおりとなった。最も多かったのは「自分の意思」で、次いで「病院」、「自助グループ」の順であった。

（7）退院後の飲酒状況については、断酒率が 38%で、「週数回」～「ほぼ毎日」飲む習慣飲酒群の 26%を上回っていた（表 25）。

（8）最後に依存症専門病院に入院したことについて、利用者の満足度を 5 段階で評価してもらったところ、「とてもよかった」と「少しよかった」を合わせると 84.1%の人が入院したことに対して良い評価を与えていた（表 26）。

今回の調査対象者 100 名の退院転帰は表 27 に示した。

なお、調査時点で最近 3 ヶ月以内にせりがや病院受診歴のある者（退院後 2～3 年を経ても外来につながっている患者群）の割合は、全調査対象 100 名中 27 名（27%）で、予後判明群のみに限定すると、61 名中 22 名（36%）という結果であった。

3. 断薬予後

（1）予後調査用紙の郵送あるいは追跡電話調査によって把握された、最近 6 ヶ月以内の利用者の予後（薬物再乱用の有無、勾留・服役中か否か、など）について、退院後 2 年目および 3 年目の 2 群にわけて円グラフで表示した（図 2-1 と 2-2）。

退院後 2 年予後群は計 47 名で、内訳は「断薬中」が 20 名（43%）、「再乱用」が 7 名（15%）、「勾留・服役中」が 1 名（2%）、「死亡」1 名（2%）、「不明」18 名（38%）である。

表 10 評価尺度平均値

	女性	男性
BDI*	29.2	23.8
WURS	54.6	45.5
BITE***	23.7	13.5
A-DES	3.77	2.88

*p<0.05, ***p<0.001

表 11 現住所の内訳

	度数(%)	女性%	男性%
実家	14(29.8)	23.5	33.3
持ち家	4(8.5)	5.9	10.0
賃貸	26(55.3)	64.7	50.0
依存症施設	2(4.3)	5.9	3.3
不定	1(2.1)	0	3.3
合計	47(100)	100.0	100.0

表 12 同居者の内訳

	度数(%)	女性%	男性%
パートナー	4(8.3)	5.6	10.0
親	17(35.4)	27.8	40.0
子供	4(8.3)	16.7	3.3
独居	20(41.7)	44.4	40.0
その他	3(6.3)	5.6	6.7
合計	48(100)	100.0	100.0

表 13 退院後の自助グループ利用状況

	度数(%)	女性%	男性%
ほぼ毎日	4(8.7)	11.8	6.9
週数回	6(13.0)	11.8	13.8
月数回	1(2.2)	0	3.4
半年で数回	5(10.9)	5.9	13.8
全く参加せず	30(65.2)	70.6	62.1
合計	46(100)	100.0	100.0

表 14 生活の規則性 ①起床時間

	度数(%)	女性%	男性%
規則的	24(52.2)	58.8	48.3
やや規則的	9(19.6)	17.6	20.7
どちらともいえない	5(10.9)	11.8	10.3
やや不規則	4(8.7)	11.8	6.9
とても不規則	4(8.7)	0	13.8
合計	46(100)	100.0	100.0

退院後3年予後群は計53名で、内訳は「断薬中」が24名(45%)、「再乱用」が2名(4%)、「勾留・服役中」が4名、「死亡」2名、「不明」21名である。

両群ともに断薬率は4割を超え、不明者の数も4割近い数字であった。一方、2年予後群では3番目に再乱用群が多かったが、3年予後群では勾留・服役中の者が第3位をしめていた。

(2) 両群合わせた全体では、調査対象者100名中61名が予後判明群であった(予後曲線は図3に示す)。その内、断薬中の者が計44名(判明群中72%)、再乱用者が計9名(同15%)、勾留・服役中の者が5名(同8%)、死亡者は3名(5%)であった。

4. 予後不明群について

連絡先などが不明で予後が判明しなかった群(100名中39名)の臨床的特徴を検出するため、先行調査項目すべてについて、予後判明群との比較を試みた。その結果、統計学的に有意な差($p<0.05$)が検出されたのは、以下の3点である。

(1) 予後不明群のBDI得点は平均29.0点で、予後判明群の平均23.2点より有意に高かった。

(2) 予後不明群の方が、自殺企図年齢が26.5歳で、判明群の20.4歳と比べて有意に高かった。

(3) 最近3ヶ月間通院歴が無い者の割合が、予後不明群は87.2%で、判明群の63.9%と比べて有意に高かった。

5. 調査項目と断薬予後との関連

(1) 上述した先行調査の各項目と、断薬予後との関連性を検討するため、まず断薬群と、非断薬群(再乱用、勾留・服役、死亡)に二分し、各項目との χ^2 乗検定またはt検定を行った。その結果、入院時の「希死念慮の有無」($p<0.05$)を除き、他の調査項目はいずれも退院後の予後との統計学的に有意な関連性は認められなかった。

(2) 次に、予後に影響する要因を、交絡因子の影響を除去して抽出するために、2項ロジスティック回帰分析を行い、2年予後に影響を与える因子について確認した。その具体的方法は、入院時における人口統計学および精神医学的事項を独立変数とし、2年後予後に関する変数を従属変数とし、 $p<0.1$ を選択基準として独立変数を投入し、そのうえでp値の大きい変数から順次除いて

いくという変数減少法による方法を採用した。

その結果、選択条件を満たす独立変数は「希死念慮の有無($p=0.033$)」とBITE総得点25点以上によって定義づけられる「(評価尺度上の)神経性大食症の有無($p=0.067$)」の2つで、最終的に得られたロジスティック・モデルでは、「希死念慮の有無」が有意な変数として抽出された($p=0.044$,

表 15 生活の規則性 ②掃除片付け

	度数(%)	女性%	男性%
よくする	14(30.4)	41.2	24.1
時々する	8(17.4)	17.6	17.2
どちらともいえない	12(26.1)	11.8	34.5
あまりしない	6(13.0)	11.8	13.8
ほとんどしない	6(13.0)	17.6	10.3
合計	46(100)	100.0	100.0

表 16 生活の規則性 ③歯磨き洗顔

	度数(%)	女性%	男性%
毎日する	29(63.0)	88.2	48.3
ほぼ毎日する	7(15.2)	5.9	20.7
どちらともいえない	5(10.9)	5.9	13.8
余り毎日ではない	3(6.5)	0	10.3
ほぼ毎日ではない	2(4.3)	0	6.9
合計	46(100)	100.0	100.0

表 17 生活の規則性 ④食事

	度数(%)	女性%	男性%
規則的	15(32.6)	29.4	34.5
やや規則的	7(15.2)	23.5	10.3
どちらともいえない	14(30.4)	35.3	27.6
やや不規則	4(8.7)	0	13.8
とても不規則	6(13.0)	11.8	13.8
合計	46(100)	100.0	100.0

表 18 生活の規則性 ⑤計画性

	度数(%)	女性%	男性%
とてもある	15(32.6)	47.1	24.1
ややある	8(17.4)	29.4	10.3
どちらともいえない	10(21.7)	5.9	31.0
あまりない	9(19.6)	17.6	20.7
全くない	4(8.7)	0	13.8
合計	46(100)	100.0	100.0

Odds ratio 4.625, [1.044-20.497])。この結果は、これまで希死念慮を抱いたことのある者は、そうでない者に比して、2 年後に断薬をしている確率が 4.625 倍に高まることを意味している。

(3) 予後調査用紙項目と断薬予後との関連を χ^2 乗検定により確認したところ、生活の規則正しさ（特に歯磨き・洗顔、夜更かし、生活の計画性）においてのみ、退院後の断薬と、統計学的に有意な関連がみられた ($p < 0.05$)。

D. 考察

1. 先行調査項目について

薬物依存症者の入院時平均年齢は 34 歳と若い。その入院に至るまでの道のりは、青年期の「生き辛さ」が山積しているといっても過言ではないことが、本調査結果からも浮き彫りになっている。

女性では 6 割が平均 8 歳で、男性も 1 割弱が 6 歳で性的虐待を経験し、男性女性ともに 4～5 割がほぼ同時期に身体的虐待も受けている。小学校高学年～中学校に入る年齢になると、タバコ・アルコールといったいわゆる“gateway drug”が始まり、また 7 割が窃盗を繰り返すようになる。そのまま 8 割は最終学歴が中卒～高卒止まりとなる。中学や高校を離れ、否応もなく社会適応をせまられる頃、平均 19 歳で自傷行為が始まり、平均 20 歳で依存性薬物に手を出すようになる。彼らの 8 割が、薬物によって「うつが改善する」と感じており、また 2 割はダイエット目的に乱用する。

依存の形成は速やかで、平均 22～3 歳頃には使用頻度が最も高くなる時期を迎え、すぐに薬物事犯で逮捕されることとなる。一度逮捕されても、恐らく乱用が止まることがないのであろう。さらに遅れること 3～4 年、平均 26～7 歳頃に初回の実刑判決を受けることになる。1～2 回の服役を経験して 30 歳代も半ばにさしかかろうとする頃、ようやく依存症専門病院に出会うのであろう。

今回、調査結果の一部で男女差についても統計学的に検討した。有意差の出たものを挙げるだけでも、女性の薬物依存者の方が男性と比較して高い率で性的虐待を受け、高い率で中学生時代に不登校に陥り、BDI や BITE の点数も高い結果となった。女性の方が自殺企図を始める年齢が平均で 7 歳も低く、企図回数も男性の 5 倍に達している。

男性よりも、より早期に「生き辛さ」にぶつかり、うつ症状や食行動異常を呈する中で、薬物依

表 19 生活の規則性 ⑥夜更かし

	度数(%)	女性%	男性%
ほとんどしない	13(28.3)	41.2	20.7
余りしない	12(26.1)	23.5	27.6
どちらともいえない	8(17.4)	17.6	17.2
時々する	6(13.0)	0	20.7
しばしばする	7(15.2)	17.6	13.8
合計	46(100)	100.0	100.0

表 20 勤務形態(複数回答)

	度数(%)
週35時間の常勤正社員	19(28.8)
週35時間の常勤バイト	10(15.2)
週20～30時間の常勤・パート	3(4.5)
週10～20時間の非常勤・パート	6(9.1)
週10時間以下の非常勤・パート	8(12.1)
無職	20(30.3)
合計回答数	66(100)

表 21 職種の内訳(複数回答)

	度数(%)
飲食業（風俗除く）	10(19.6)
会社員	6(11.0)
土木建築	5(9.8)
交通運輸	4(7.8)
商業	3(5.9)
医薬関係	3(5.9)
家事手伝い	3(5.9)
公務員	2(3.9)
その他被雇用者	2(3.9)
無職	2(3.9)
不定	2(3.9)
不動産	1(2.0)
自営職人	1(2.0)
露天行商	1(2.0)
店員	1(2.0)
旅館業	1(2.0)
日雇い労働者	1(2.0)
その他	3(5.9)
合計回答数	51(100)

存とならんで自傷行為も対処行動の一つとなりうる。興味深いのは、自傷行為の方法が、女性の場合はいわゆるリストカットや抜毛、皮膚を引っ掻く、など比較的繊細で自罰的なものが有意に多かったのに対して、男性は「頭突き」といった攻撃的なものが有意に多かった点である。さらに自傷行為の動機についても、「気分転換」目的と答えた人が男性の3倍以上おり、女性の薬物依存症者が不快な気分から逃れるために、薬物と自傷行為を自己治療的に用いているものと考えられる。

図1 就労期間

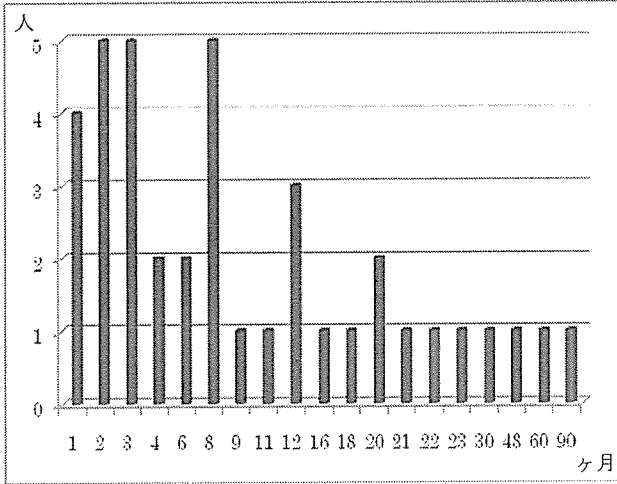


表 22 退院後再使用した薬物の内訳

	度数(%)
覚せい剤	14(50)
有機溶剤	3(10.7)
大麻	3(10.7)
睡眠薬	2(7.1)
抗不安薬	2(7.1)
咳止め	2(7.1)
痛み止め	1(3.6)
MDMA	1(3.6)
合計	28(100)

表 23 退院後再使用した時期

	度数(%)
退院直後～3ヶ月以内	17(60.7)
退院3ヶ月～6ヶ月以内	3(10.7)
退院6ヶ月～1年以内	4(14.3)
退院1～2年以内	3(10.7)
退院2～3年以内	1(3.6)

表 24 断薬が継続できている理由(複数回答)

	度数(%)
自分の意思	12(17.6)
病院に通っていたから	11(16.2)
自助グループに通っていたから	10(14.7)
家族がいてくれたから	9(13.2)
パートナー・友人の助け	8(11.8)
単に使用欲求が無かった	6(8.8)
仕事が多忙だった	5(7.4)
入院・服役中だった	3(4.4)
その他	4(5.9)
合計	68(100)

表 25 退院後のアルコール使用状況

	度数(%)	女性%	男性%
断酒中	16(38.1)	50.0	30.8
半年で数回	7(16.7)	6.3	23.1
月数回	8(19)	12.5	23.1
週数回	7(16.7)	25.0	11.5
ほぼ連日	4(9.5)	6.3	11.5
合計	42(100)	100.0	100.0

表 26 入院に対する満足度

	度数(%)	女性%	男性%
とてもよかった	21(47.7)	64.7	37.0
少しよかった	16(36.4)	29.4	40.7
よくも悪くもない	2(4.5)	0	7.4
余りよくなかった	3(6.8)	0	11.1
とても良くなかった	2(4.5)	5.9	3.7
合計	44(100)	100.0	100.0

表 27 退院転帰

	度数=%	女性%	男性%
軽快退院	56	61.3	53.6
希望退院	27	32.3	24.6
事故(強制)退院	13	3.2	17.4
転院	2	3.2	1.4
不明	2	0%	2.9
合計	100	100.0	100.0

2. 予後調査項目について

今回の調査結果では、自助グループをほとんど利用せず、独居または親元で暮らしているにも関わらず、生活リズムは比較的保たれ、過半数が断酒または機会飲酒程度、というやや予想外の結果となった。退院後、約半数が週 20 時間以上の仕事に就いた経験があり、内、3 割が週 35 時間以上の正社員として働いていた。また回答者の 6 割以上が現在定期的な通院をしているわけではないにもかかわらず、過去の入院を振り返ってみて、8 割以上が「よかった」と評価していることも意外であった。調査対象者全員の退院転帰を調べても、臨床実感に反して、希望退院と事故（強制）退院は合わせて 4 割程度と半数に満たなかった。予後判明者の 7 割が退院して 2～3 年を経ても断薬している、という結果と合わせて、「臨床現場で感じているよりも、実際には薬物依存症は予後が良いのではないか?」、と思わせる結果となった。

予後が判明しなかった群が依然 4 割残っているが、その入院時プロフィールは BDI の得点と初回の自殺企図年齢が高めであることを除くと、他の点では全く判明群と有意差が無く、この群だけが極端に予後が悪いと判断する材料としては不十分であると思われる。

3. 調査項目と断薬予後との関連について

予後が予想以上に良いことと並んで意外な結果であったのは、先行調査項目の 77 個の変数の内、断薬予後との統計学的に有意な関連性が見出されたものは、「希死念慮の有無」だけであった、という点である。

入院時に希死念慮が有る方が、入院プログラム参加に際して障害となり、退院後も自殺企図に結びつきやすいなど、予後を悪くする因子とも思われる。ところが実際は、希死念慮が有る方が、2 年後断薬率が約 4 倍になる、という結果が出た。これは、希死念慮を有するほどの精神状態で入院に至った方が、いわゆる「底尽き体験」として本人に作用し、退院後の断薬生活を目指す動機付けとなった可能性が示唆される。

退院 2～3 年後に実施した予後調査項目の中では、「生活の規則正しさ」を示唆する下位項目が断薬群との関連で有意差を認めた。断薬群の生活リズムが規則正しいのはある意味で当然の結果であり、依存症の回復過程で行動療法的に生活のス

図2-1 退院後 2 年目予後群

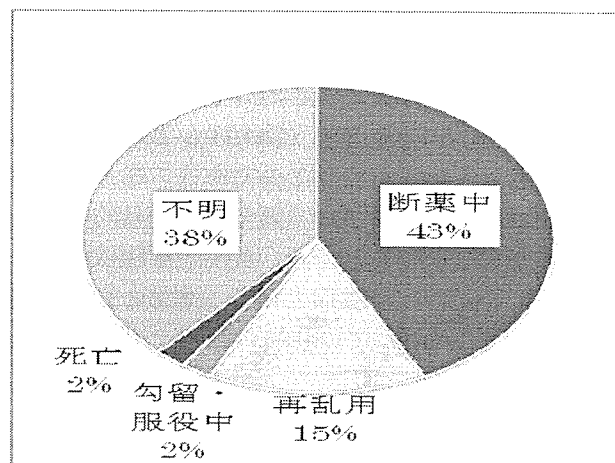


図2-2 退院後 3 年目予後

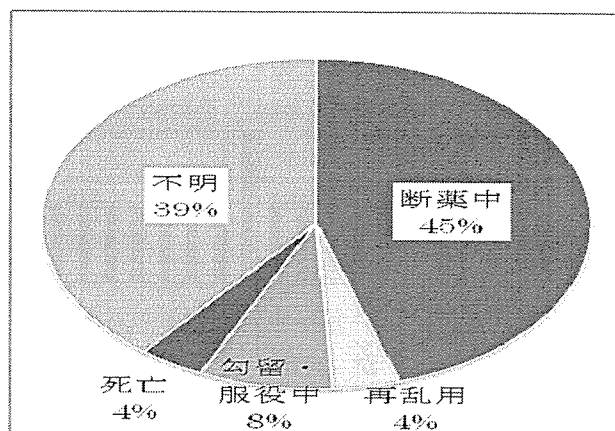
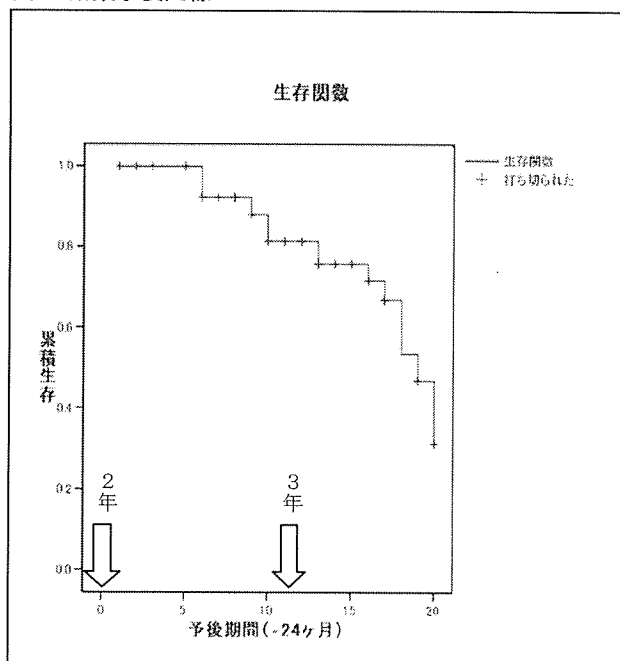


図3 断薬予後曲線



ケジャーリングを促進することの重要性を示唆する結果と言えよう。

上記以外のほとんどの変数は、今回断薬予後との有意な関連性を見出すことはできなかった。一因としてサンプルサイズの問題も想定しうが、別の見方をすれば、薬物依存症からの回復が意味している「薬物に頼らない生き方」が、実に多様な因子から成り立ち、個別性に富んだ現象であるためとも考えられる。

薬物依存の臨床に携わる者は、自らが勤務している施設から離脱してしまった患者の予後に関しては、しばしば悲観的な見方をしがちである。一方で「依存症の回復に方程式など無い」と、臨床場面で実感させられることが多いのも事実であり、退院転帰や継続的通院、自助グループ通所などの治療的因子がいずれも断薬予後と有意な関連を示さなかったことは、ある意味でこの臨床感覚を裏打ちするものである。

2/3 を超える患者がもはや外来にはつながっていないにもかかわらず、その多くが過去の入院を前向きにとらえ、どのような退院の仕方であれ、とにかく 2~3 年が経過した時点で薬物をやめ続けている、という今回の調査結果は、薬物依存症者に対する入院治療の在り方として、一つの方向性を示唆していると思われる。

E. 結論

任意入院・開放病棟を基本とする薬物依存専門病院において、入院による断薬リハビリプログラムに参加した利用者の退院 2 年後および 3 年後予後調査を実施した。入院時点で記入してもらった先行調査項目に加えて、同意者に対して新たに郵送あるいは電話で予後調査を行い、薬物使用を含めた退院後の生活状況を確認した。

入院時の薬物依存症者のプロフィールとしては、早期に虐待を経験し、gateway drug の乱用、窃盗や学校不適応などを経て、自傷行為や薬物乱用に至る「生き辛い青年期」が特徴的であった。

予後調査では、2 年および 3 年予後群に分けられ、それぞれ対象数は 47 名と 53 名であった。そのうち予後が判明したのは 29 名 (62%) と 32 名 (61%) で、断薬率は 29 中 20 名 (68.9%) と 32 名中 23 名 (71.8%) であった。

両群合わせた全体では、調査対象者 100 名中 61 名が予後判明群で、その内、断薬中の者が計 44

名 (判明群中 72%)、再乱用者が計 9 名 (同 15%)、勾留・服役中の者が 5 名 (同 8%)、死亡者は 3 名 (5%) であった。

断薬予後との関連性については、入院時の希死念慮の存在が統計的に有意な因子で、希死念慮があと 2 年後断薬群に入る確率が 4 倍になる、という結果が示された。その他の項目については有意な関連性を認めず、患者個別の因子が多様に予後に影響していることが考えられる。

退院転帰や自助グループの有無が画一的に退院後の予後を規定する因子では無いとするならば、入院治療に当たっては、なおさら各患者に適した個別の治療契約や治療プログラム等の働きかけを通して底尽きを促すことが重要と思われる。

F. 研究発表

1. 論文

なし

2. 口頭発表

なし

3. その他

なし

文献

- 1) Bernstein E, Putnam FW: Development, reliability and validity of a dissociation scale. J Nerv Ment Disease 174: 727-735, 1986
- 2) Armstrong J, Putnam FW, Carson EB: Development and validation of a measure of adolescent dissociation: The Adolescent Dissociative Experience Scale (A-DES). J Nerv Ment Dis 185: 491-497, 1997
- 3) Matsumoto T, Azekawa T, Yamaguchi A et al: Habitual self-mutilation in Japan. Psychiatry Clin Neurosci 58: 191-198, 2004
- 4) Matsumoto T, Yamaguchi A, Chiba Y et al: Patterns of self-cutting: A preliminary study on differences in clinical implications between wrist- and arm-cutting using a Japanese juvenile detention center sample. Psychiatry Clin Neurosci 58: 377-382, 2004
- 5) Henderson M, Freeman CPL: A Self-rating Scale for Bulimia, the "BITE". Br J Psychiatry 150: 18-24,

1987

6) 中井義勝, 濱垣誠司, 高木隆郎: 大食症質問表 Bulimic Investigatory Test, Edinburgh(BITE)の有用性と神経性大食症の実態調査. 精神医学 40: 711-716, 1998

7) Ward MF, Wender PH and Reimherr FW: The Wender Utah Rating Scale: an aid in the retrospective diagnosis of childhood attention deficit hyperactivity disorder. *Am J Psychiatry* **150**: 885-890, 1993.

8) 松本俊彦, 山口亜希子, 上條敦史, ほか: 女性物質使用障害における摂食障害: 乱用物質と摂食障害の関係について. 精神医学 **45**: 119-127, 2003

分 担 研 究 報 告 書
(2－2)

民間治療施設利用者の予後調査(1)

ーダルク利用者の予後調査ー

分担研究者	近藤千春	藤田保健衛生大学
研究協力者	猪瀬健夫	びわこダルク
	栗坪千明	栃木ダルク
	幸田 実	東京ダルク
	川又聡一郎	大分ダルク
	竹内 剛	長野ダルク

研究要旨 薬物依存症の回復に有効だとされる、薬物依存症者の当事者活動団体DARC利用者に
対する縦断的な調査を行い、薬物依存症治療における、ダルク利用の有用性について明らかにする
ことを目的とした。対象は、5箇所のダルクの28名が対象となった。調査項目は、初回面接時に、
①対象者の属性、(年齢、学歴、乱用開始年齢、乱用薬物、乱用期間、乱用に関連する集団等)、②
社会生活に関する事項、③補導・逮捕歴、矯正施設への入所状況、④医療機関の利用状況 ⑤過去
のダルクの利用状況について調査した。追跡調査項目としては、①断薬状況、②薬物依存度、WHO
QOL26 他を調査した。結果、28名のダルク利用者を対象とした。28名のうちダルク入寮中の生活に
ついて追跡できた対象は、7名であった。28名の入院経験、刑務所入所経験、ダルク入所経験等、
これまでの生活背景を基にしたダルク利用に至る背景やその人数をまとめた。表6参照。また、薬
物乱用にかかわる背景とダルク利用に至る経緯については、図にまとめた。図2参照。対象の生活
背景に関する情報を基に、就労難易度を算出し、ダルク利用者の就労能力を予測するための指標と
した。これらから、ダルクの利用期間が1ヶ月未満の者は9名であり、この9名については、ダル
ク入寮にあたっての断薬に対する動機が極めて低かったと思われる。長期ダルク滞在者5名は、就
労もしくは、就労のための準備に取り組んだ。一般企業に就職した者のダルク利用期間は20ヶ月で
あった。滞在期間が長い理由として、ダルク滞在中の退寮前半年間は、工場でアルバイトを行い就
労訓練に取り組んでいたことによる。ダルク入寮中の、就労に向けた準備は、本人だけでなく、他
の入寮者の励みにもなり、利用者相互にとって意義があると考ええる。対象者5名のうち3名が、ダ
ルクの職員となるための研修を開始したが、ダルクへの就労の理由には、対象の前歴や年齢などか
ら、一般企業への就職が困難であることなども関連すると思われる。現在のダルク利用に至る背景、
補導や逮捕歴と薬物乱用との関連等については、図表にまとめた。(表6、表7、図2参照)ダル
ク利用者の生活背景は、薬物乱用前の準拠集団やこれまでの就労状況など様々である。様々な生活
背景を持つダルク利用者の予後の評価にあたっては対象の就労における難易度を考慮すべきである
と考え、その指標とするものとして、「就労難易度」を算出した。この他、家族の介入が、利用者
のダルク利用の継続に影響をもたらすものである点が示唆され、ダルク利用者と家族との関係にお
いて考慮すべき点があると思われた。

A. 研究目的

薬物依存症の回復に有効だとされる、薬物依存
症者の当事者活動団体DARC(以下ダルク)に
対する縦断的な調査は、ダルク利用の有用性の検

証を行う上で、重要である。ところが、これまで
にダルク利用者に対する縦断的な調査を行った研
究報告は極めて少なく、ダルクの薬物依存症治療
における有用性については、明らかにされている

わけではない。このことから、本研究において、ダルク利用者に対する追跡調査を実施することを通して、薬物依存症治療における、ダルク利用の有用性について明らかにすることを目的とした。

ところが、ダルクは、医療の専門家を含まない当事者活動団体であり、その援助は、ダルクの責任者らによると、規則正しい生活をととのえること、ミーティングの場を通して気持ちを整理すること、社会復帰のための相談を行うことのほか、12ステップにより、新たな生き方を身につけることであるという。（図1参照）そのため、ダルクを民間治療施設として記すためには、薬物依存症治療における治療的な位置付けを明確にすること

が求められる。そこで、ダルクにおける治療とは何かを明らかにするために、ダルクの責任の話に基づき、ダルク利用における治療の目標、つまりダルクの利用のゴールが何であるかを明確にしたうえで、ダルク利用の有用性の評価を行うことが必要であると考えた。ダルク責任者らの話によると、ダルク利用によるゴールは、1、薬物を使わない新たな生き方が必要であると感じること。2、断薬の継続のための動機付けがされること。3、「全体性」の回復であり、physical, mental, social な面での回復に加え、12ステップの1, 2, 3に基づいた考え方による、spiritual な面での回復の3点があげられた。ところが spiritual は、

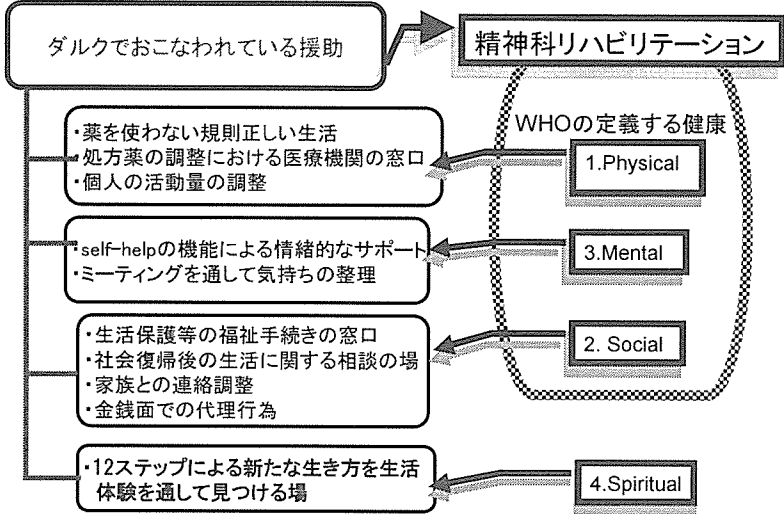


表 1 図1ダルクにおける援助

	定収容員	職 員	運営資金
Aダルク	定員 8 名	責任者 1 名 スタッフ 2 名 職員は施設に同居	公的助成金は受けていない。
Bダルク	定員 8 名	責任者 1 名 スタッフ 1 名	公的助成金は受けていない。
Cダルク	定員 10 名 福祉ホーム	責任者 1 名 スタッフ 4 名 職員は全員通勤 夜間は当番での当直制	公的助成金による運営。
Dダルク	定員 38 名	代表 1 名 責任者 2 名 スタッフ 4 名 スタッフは施設内同居	公的助成は受けていない
Eダルク	定員 5 名のグループホーム	責任者 1 名 スタッフ 2 名 全員通勤	小規模保護作業所を併設 助成金による施設運営

WHO が、新たな健康の定義にこれを含むことを提案したが、未だ、明確に定義されておらず、理解が困難なものである。依存症と spirituality については、論文やその他の形でまとめられているが、spirituality は、いずれも暫定的な定義付けにとどまっている¹⁾。一方、spiritual は、人間の健康の回復においては、physical, mental, social な面と同様に重要なものであるという研究報告もあり²⁾、ダルクでの薬物依存症の回復を評価するにあたって、physical, mental, social な面に加え、spiritual における変化も視野に入れることが必要であると思われる³⁾。そこで、ここでは、spiritual における変化とは、価値観の変化に基づく「生き方」の変化とし、具体的には、生活の行動面における変化として捉え、ダルク利用者の追跡調査に取り組むことにした。

B. 研究方法

1) 対象

(1) 対象ダルク

調査対象となった施設は、表 1 に示した 5 施設であり、いずれも責任者と面識があり協力が得られた施設である。

(2) 対象者

調査対象となったダルクを利用する薬物依存で、追跡調査に協力することを同意した者。

2) 調査方法

(1) 調査項目

A. 対象者の背景に関する調査項目⁴⁾

①乱用にかかわる事項

年齢、学歴、乱用開始年齢、乱用薬物、乱用期間、乱用に関連する集団

②社会生活に関する事項

取得している資格、これまでの就労状況、現在の生活費

③司法とのかかわり

補導・逮捕歴、矯正施設への入所状況

④医療機関の利用状況

⑤過去のダルクの利用状況

B 追跡調査項目

①断薬状況

②薬物依存度（依存重症度尺度 日本語版；以下 SDS-J）⁵⁾

③生活行動（日常の生活行動尺度：オリジナル）⁶⁾

④精神活動（日常における精神活動尺度：オリジナル）⁶⁾

⑤12 ステッププログラムの理解度（超越性の受容度尺度；オリジナル尺度）⁶⁾

⑥QOL（WHO, QOL 26 日本語版）⁷⁾

⑦生活状況に関する事項（半構成による質問調査）

C. 研究結果

1) 対象のダルク利用状況と予後

平成 17 年 7 月から平成 19 年 3 月までに、5 箇所のダルクで、28 名の利用者から協力を得ることができたが、中途退所者が多く、追跡調査の対象となったのは 7 名であった。中途退所者については、所在が確認できず、予後については不明である。調査の対象となった 28 名のダルク利用状況は、表 2 に示した。追跡調査の対象の 7 名人のうち、5 名の者が、薬物を使うことなく、社会復帰を目指し、就職や、将来に向けて研修を受けている。5 名の現在の状況を表 3 に示した。

表 3.

	滞在期間	所在	現在の状況
A氏	20 ヶ月	退所	民間企業に就職 現在賃貸アパートで 1 人暮らし
B氏	19 ヶ月	滞在中	利用ダルクで、ダルクの職員研修を実施中
C氏	18 ヶ月	滞在中	利用ダルクで、ダルクの職員研修を実施中
D氏	15 ヶ月	退所	他のダルクで、ダルクの職員研修を実施中
E氏	15 ヶ月	退所予定	1 ヶ月以内にダルクを退所し、民間企業に就職を予定

2) 対象者の背景

(1) 対象者の薬物乱用にかかわる事項

薬物乱用にかかわる生活背景として考えられる学歴、乱用開始年齢、初回飲酒年齢、常用飲酒となった年齢、初めて喫煙を始めた時期、暴力団との関係、非行グループとの関係、薬物乱用者との関係、補導歴、逮捕歴等については、表 4 のような結果であった。

(2) 対象者の社会生活にかかわる事項

現在の経済状況および過去の就労経験など、将来の生計能力にかかわる項目については、表 5 のような結果であった。

(3) 現在のダルク利用に至る背景

入院経験、刑務所入所経験、ダルク入所経験等、これまでの生活背景を基にしたダルク利用に至る

表4 (1)対象者の薬物乱用にかかわる事項

No	歳	学歴	乱用開始	初回飲酒	常用飲酒	初喫煙	煙草常用	暴力団関係	非行グループ	薬物乱用者	補導歴	逮捕歴
1	38	高校中退	15歳	中学校	20歳以降	小学校	中学校	乱用前	乱用前	乱用前	無し	無し
2	53	中学卒	12歳	中学校	中学校	中学校	中学校	乱用後	無し	乱用後	無し	無し
3	28	高校卒業	13歳	小学校	中卒後	中学校	中学校	乱用後	乱用前	乱用前	乱用後	無し
4	43	高校中退	13歳	中学校	無し	小学校	中学校	無し	乱用前	無し	乱用後	乱用後
5	24	大学在学中	18歳	中学校	20歳以降	小学校	中学校	乱用前	乱用前	乱用前	無し	無し
6	25	高校中退	15歳	中卒後	無し	小学校	中学校	乱用後	乱用前	乱用前	乱用前	乱用後
7	27	中学卒	22歳	小学校	無し	小学校前	中学校	乱用前	乱用前	無し	無し	無し
8	27	高校卒業	21歳	中学校	無し	中学校	中学校	乱用前	無し	乱用前	無し	乱用後
9	26	中学卒	13歳	中学校	18～19歳	中学校	中学校	乱用前	乱用前	乱用前	乱用後	乱用後
10	38	中学卒	14歳	無し	無し	小学校	中学校	乱用前	乱用前	乱用前	乱用前	乱用後
11	41	中学卒	15歳	中卒後	20歳以降	小学校	小学校	乱用後	乱用前	乱用後	乱用後	乱用後
12	25	大学中退	17歳	小学校前	無し	中学校	中学校	無し	無し	無し	無し	無し
13	不詳	高校卒業	18歳	18～19歳	無し	小学校	中学校	無し	乱用前	乱用前	無し	乱用前
14	19	高校中退	15歳	中卒後	無し	中学校	中学校	乱用前	乱用前	乱用前	乱用前	無し
15	31	高校中退	26歳	中卒後	無し	中学校	中学校	無し	無し	無し	無し	無し
16	29	専門学校卒	19歳	18～19歳	18～19歳	中学校	中学校	無し	乱用前	乱用前	乱用前	無し
17	46	高校中退	23歳	20歳以降	20歳以降	20歳以降	20歳以降	無し	乱用前	乱用後	乱用前	無し
18	21	高校中退	14歳	小学校前	中学校	小学校前	小学校	無し	無し	無し	無し	乱用前
19	35	高校中退	16歳	中学校	中卒後	中学校	中学校	乱用前	乱用前	乱用前	乱用前	乱用前
20	44	中学卒	15歳	中学校	中学校	中学校	中学校	無し	乱用前	乱用前	乱用前	乱用後
21	39	高校中退	17歳	中学校	中卒後	中学校	中学校	乱用前	乱用前	乱用前	乱用前	乱用前
22	30	専門中退	15歳	中学校	18～19歳	中学校	中学校	無し	無し	無し	乱用前	乱用後
23	31	大学中退	20歳	中学校	中卒後	中学校	無し	無し	無し	無し	乱用後	乱用後
24	25	高校中退	12歳	小学校	中学校	小学校	中学校	乱用後	乱用前	乱用後	乱用前	乱用前
25	42	中学卒	13歳	中学校	中学校	中学校	中学校	乱用後	乱用後	乱用後	乱用後	乱用後
26	34	中学卒	15歳	中学校	無し	中学校	中学校	無し	無し	乱用前	乱用後	無し
27	24	高校中退	19歳	中学校	無し	中学校	高校	無し	無し	乱用前	乱用前	乱用前
28	35	高校中退	14歳	中学校	中学校	中学校	中学校	乱用後	乱用前	乱用前	乱用後	乱用後

表 5 (2)対象者の社会生活にかかわる事項

No	年齢	乱用開始	当ダルク入所期間	生活費の支払い	就労経験	就労経験のうち勤続年数別件数				
						1年未満	1年以上	2年以上	3年以上	5年以上
1	38	15才	2ヶ月	生活保護	3	1	2	0	0	0
2	53	12才	7ヶ月	生活保護	5	0	5	5	3	0
3	28	13才	6ヶ月	生活保護	3	1	2	0	0	0
4	43	13才	14ヶ月	生活保護	8	0	8	5	2	0
5	24	18才	10ヶ月	親	0	0	0	0	0	0
6	25	15才	1ヶ月	生活保護	8	7	1	0	0	0
7	27	22才	1ヶ月	親	3	0	3	1	1	1
8	27	21才	15ヶ月	親	5	5	0	0	0	0
9	26	13才	5ヶ月	生活保護	1	1	0	0	0	0
10	38	14才	10ヶ月	生活保護	4	0	4	4	1	1
11	41	15才	13ヶ月	生活保護	4	3	1	1	0	0
12	25	17才	9ヶ月	親	1	0	1	0	0	0
13	不詳	18才	10ヶ月	親	4	1	3	2	1	0
14	19	15才	6ヶ月	親	3	3	0	0	0	0
15	31	26才	2ヶ月	親	7	1	6	2	1	0
16	29	19才	10ヶ月	親	3	0	3	1	1	0
17	46	23才	5ヶ月	生活保護	2	0	2	2	2	2
18	21	14才	1ヶ月	親	3	2	1	1	0	0
19	35	16才	5ヶ月	親	4	1	3	2	2	1
20	44	15才	8ヶ月	生活保護	4	0	4	4	3	2
21	39	17才	10ヶ月	生活保護	8	3	5	1	1	1
22	30	15才	5ヶ月	親	6	2	4	2	2	0
23	31	20才	1ヶ月	親	2	0	2	0	0	0
24	25	12才	2ヶ月	生活保護	3	2	1	1	1	0
25	42	13才	3ヶ月	生活保護	5	3	2	1	1	1
26	34	15才	5ヶ月	親	3	1	2	1	0	0
27	24	19才	6ヶ月	生活保護	7	4	3	1	0	0
28	35	14才	3ヶ月	生活保護	8	7	1	0	0	0

背景やその人数をまとめると、表6のような結果であった。また、これらを基に薬物乱用にかかわる背景とダルク利用に至る経緯については、図2のようになった。

(4) 補導や逮捕歴と薬物乱用との関連

薬物乱用の開始時期と、補導や逮捕等の社会的逸脱行為と関係や、その人数は、表7のような結果であった。

(5) ダルク利用者の予後にかかわる要因

対象者の様々な生活背景に関する事項を基に、将来の就労能力を予測するものとして、表8のような「就労難易度」を算出した。「就労難易度」は、乱用開始年齢との間で、やや強い負の相関(-0.562**)が認められた。

3) 追跡項目に関する結果

(1) 測定尺度の得点の変化

SDS-J(依存度)尺度やQOL尺度の一部を除いて、使用した尺度の得点には変化が見られなかった。SDS-J(依存度)尺度の得点やQOL尺度の得点は、長期ダルク滞在が、刑務所から出所して初めて家族と面会した後に、顕著な変化が見られた。(図3参照)

(2) 半構成の質問項目の結果

11名の対象者から、31のダルクでの生活体験に関連する思いについての情報を得ることが出来た。31のデータは、「断薬の動機付けの場」、「断薬の仲間作りの場」、「居場所」、「生活における気づきの場」、「処方薬の調整の場」の5つに

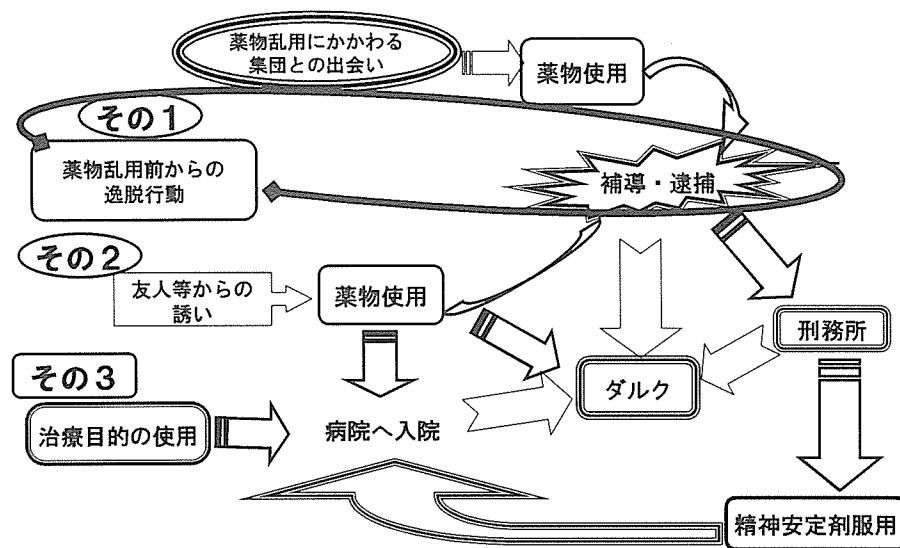


図2. ダルク利用に至る経緯

表6 (3) 現在のダルク利用に至る背景

入所前の施設経験	分類	人数（人）
1、刑務所等の矯正施設への入所のみ	Aタイプ	4
2、病院で入院治療	Bタイプ	0
3、矯正施設入所と入院治療	Cタイプ	4
4、他のダルクへの入所経験のみ	Dタイプ	2
5、ダルク利用と入院	Eタイプ	8
6、ダルク利用と刑務所など	Fタイプ	0
7、矯正施設、入院、ダルク利用	Gタイプ	5
8、その他（施設への入所経験なし）	Hタイプ	5
総 数		28

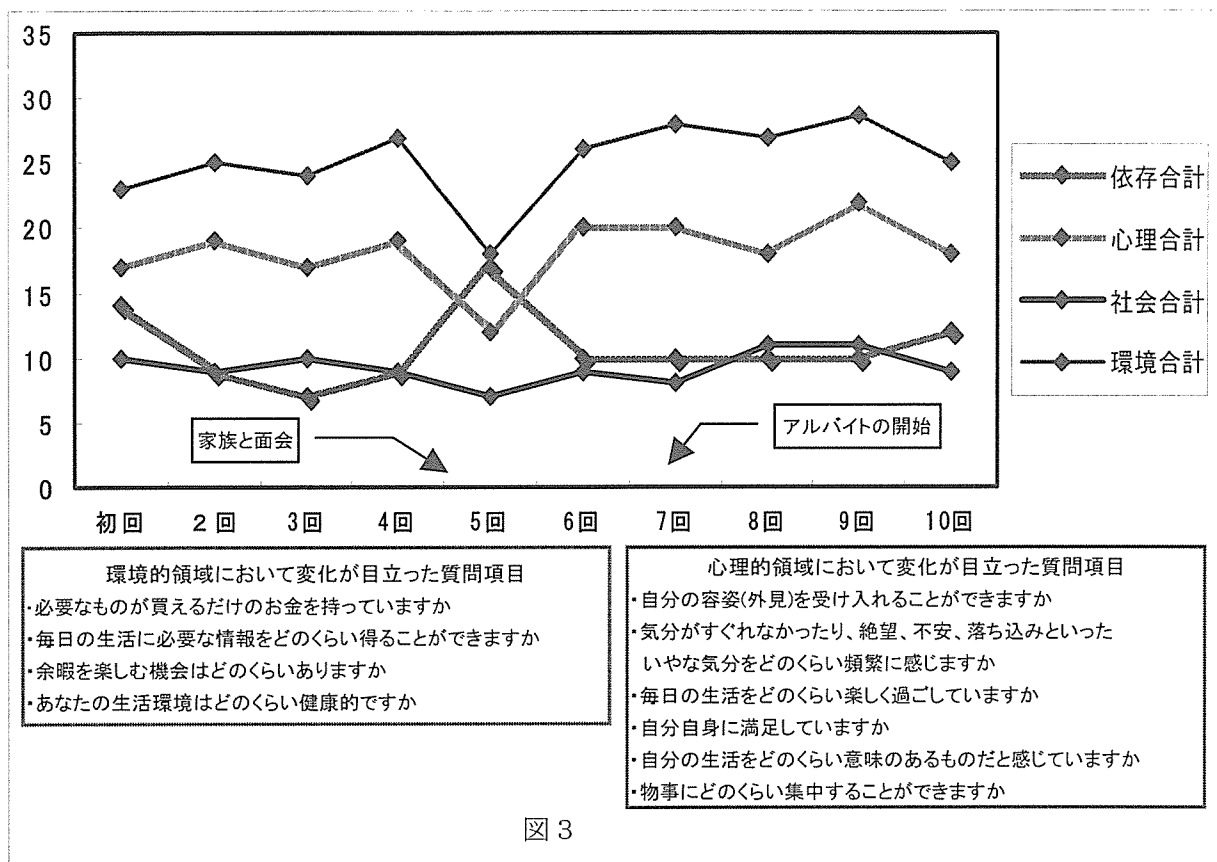


表 7. (4) 補導や逮捕歴と薬物乱用との関連

	乱用前に補導	乱用後に補導	補導歴無し	計
乱用前に逮捕	4 名		2 名	6 名
乱用後に逮捕	5 名	5 名	1 名	11 名
逮捕歴無し	3 名	2 名	6 名	11 名
計	12 名	7 名	9 名	28 名

分類し、ダルク利用の特徴として表 9 にまとめた。

(2) 半構成の質問項目の結果

11 名の対象者から、31 のダルクでの生活体験に関連する思いについての情報を得ることが出来た。31 のデータは、「断薬の動機付けの場」、「断薬の仲間作りの場」、「居場所」、「生活における気づきの場」、「処方薬の調整の場」の 5 つに分類し、ダルク利用の特徴として表 9 にまとめた。

これらのデータの収集にあたっては、調査票の質問項目の内容を確認するために、口頭で質問し入手した。面接時、録音することが望ましいが、その承諾を得ることが難しいことから、本人が語った内容を、調査者が声に出して反復し、本人に伝え、本人の了解を得た上で、可能な限り反復した言葉のままを調査票の裏面等に記した。

表 8. 就労難易度

No	年齢	乱用開始	入院回数	ダルク回数	補導ポイント (乱用前 2、 乱用後 1)	逮捕ポイント (乱用前 2、 乱用後 1)	矯正施設回数	就労ポイント (1 年 ↓ マイナス 5 年 ↑)	就労難易度
1	38	15才	2	5	0	0	0	1	8
2	53	12才	9	2	0	0	0	0	11
3	28	13才	0	5	1	0	0	1	7
4	43	13才	2	3	1	1	0	0	7
5	24	18才	0	0	0	0	0	0	0
6	25	15才	3	8	2	1	0	7	21
7	27	22才	0	0	0	0	0	-1	-1
8	27	21才	0	0	0	1	2	5	8
9	26	13才	2	0	1	1	4	1	9
10	38	14才	2	0	2	1	4	-1	8
11	41	15才	9	2	1	1	3	3	19
12	25	17才	1	1	0	0	0	0	2
13	不詳	18才	0	1	0	2	0	1	4
14	19	15才	0	0	2	0	0	3	5
15	31	26才	0	0	0	0	0	1	1
16	29	19才	0	0	2	0	0	0	2
17	46	23才	1	1	2	0	0	-2	2
18	21	14才	0	0	0	2	2	2	6
19	35	16才	0	0	2	2	1	0	5
20	44	15才	0	0	2	1	4	-2	5
21	39	17才	2	2	2	2	3	2	13
22	30	15才	3	0	2	1	1	2	9
23	31	20才	3	0	2	1	2	0	8
24	25	12才	5	4	2	2	3	2	18
25	42	13才	11	4	1	1	10	2	29
26	34	15才	3	10	1	0	0	1	15
27	24	19才	2	1	2	2	0	4	11
28	35	14才	7	11	1	1	5	7	32

表 9. 対象者のダルク利用にあたっての思い

	ダルクを利用して思うこと	分類名
1	薬を使った人を見て、どうして薬が我慢できんのかなあ	断薬の動機付けの場
2	ダルクにいて薬を使う人は馬鹿だなーと思う	
3	一人暮らしの状態で薬を使わない自信がない	
4	薬を止めるには、「薬を止めたい」という動機と居場所が必要	
5	施設を出たら使うのではないかと自信がない	
6	ダルクにいるから薬を止めている	
7	出たら使うかもしれない	
8	ミーティングでイライラが吐き出せる	
9	生活にメリハリがある	
10	居心地がいい	居場所
11	身近な存在	
12	K 施設だと嫌になって薬を使う	
13	ダルクを出てもダルクに遊びに来る	
14	行くところが無くてダルクに戻った	
15	家には戻っても入れてもらえない	
16	居場所	
17	兄貴のような存在	
18	恩師のような存在であり両親のよう	
19	ミーティングは嫌だけど仲間がいる	断薬の仲間作りの場
20	薬を使うとみんなと同じでいられない	
21	スリップして人にどう思われているか気になる	
22	ダルクの人間関係は、施設長のキャラクターによる	
23	ダルクの人間関係は、刑務所の上下関係より難しい	
26	ダルクではみんな我慢している	
27	ダルクは、上下関係がない	
24	ミーティングの話からヒントが得られる	気づきの場
25	ミーティングは気付くことができる重要な場	
28	一つ一つの積み重ねで成り立つ場	
29	先ゆく仲間は、気づきを与えてくれる人	
30	刑務所で安定剤を毎食、毎晩投薬された	処方薬の調整の場
31	退院後 K ダルクに 11 ヶ月いて服薬寮をだんだん減らしてもらった	

(3)ダルクを利用し、社会復帰に結びついたケースの特徴

28 名の対象者のうち 1 名の者が、ダルクを 20 ヶ月利用した後に、民間の企業に就職した。このケースの生活背景を表 10 にまとめ、依存度得点と、QOL の各項目の得点の推移を図 3 にまとめた。また、面接時に入手したダルク利用にあたって思いについてのデータは、表 11 にまとめた。

D. 考察

1) 対象者のダルク利用状況と予後

(1)ダルク滞在期間について

ダルクの利用期間が 1 ヶ月未満の者は、9 名であった。このうちの 7 名は、ダルクの利用料を家族が支払っており、ダルク利用の動機の背景には、親の強い意向がたつたと思われる。

ダルクは、矯正施設でないことから、利用にあたっては、任意での入退所が基本となる。このため、利用にあたっては、本人に薬物を止めたいという動機があることが、条件となる。ところが、ダルクを 1 ヶ月で退寮した 9 名については、断薬に対する動機を持っていたか疑問である。また、

表 10. 事例の生活背景

タイプ	年齢	学歴	就労経験	利用期間	生活費
Aタイプ	27 歳	高校卒業	5 回(1 年未満 5 回)	20 ヶ月	親
逸脱集団とのかかわり			検挙歴		
暴力団関係	非行集団	薬物乱用者	補導歴	逮捕歴	
乱用前	なし	乱用前	なし	乱用後	
依存物質使用歴					
初回飲酒		常用飲酒	初喫煙	タバコ常用	
中学校		なし	中学校	中学校	
乱用開始年齢	初回使用薬		動機	誘った人物	主な薬物
21 歳	覚醒剤		歯痛の軽減	異性の友人	覚醒剤

表 11. 事例のダルク利用にあたっての思い

	A の語り	分 類
1	居場所、半年以上置いてもらおう。居やすい。	ダルクの利用目的
2	50 万円を貯めることを目標にしている。	
3	ダルクを出たら生活がきつくなる。	
4	100 万円くらい貯まるまで居たい。	
5	薬を止めるには、「薬を止めたい」という動機と居場所が必要	断薬に必要なこと
6	薬を使った人を見て、どうして薬が我慢できんのかなあ。	
7	ミーティングばかりだと嫌になる。ガチガチだとだめ。	
8	K 施設だと嫌になって薬を可能性大きい。	
9	ダルクにいるから薬を止めている。出たら使うかもしれない。	ダルクへの帰属
10	ダルクを出てもダルクに遊びに来る。	
11	ダルクの環境が自分にあっているかどうかで居られる。	
12	ミーティングは嫌だけど仲間がいる。	
13	ダルクのカラー(人間関係)は、施設長のキャラクターと、合うかどうかによる。	ダルク退寮後の生活
14	女性とは生活に余裕が出てからでないと、ちゃんと付き合うことができない。	
15	お金がないと遊べない	
16	職場で刑務所に入っていたことが話せない。話題に困る。	
17	ダルクに来てルールがあるから守って生活しているが外に出たら分らない。	